

「気づかい」を解消するために

ゆうゆうマーシー（増毛町）

増毛地域通貨券「ゆうゆうマーシー」、この券の裏側にはこう書かれている。

「このマーシー券は本来のお金としての価値は全くありませんが、お金で表せない『善意・お礼の気持ち』を交換するための『あたたかいお金』です」

この「あたたかいお金」は、善意とお礼の間に生じる「気づかい」をいかに解消するか、という発想で町の有志で考案された。通貨券と銘打っており、一部会員同士のやり取りや、町営温泉やリフト券の割引サービス、ゴミ袋購入などで利用できる。

この通貨券に関する事務を担っている増毛町福祉厚生課の佐々木香織さんは、「将来的にはこの町のレストランで食事して、その支払いをこの券で出来るようになればいいのですが、現在の段階では地域通貨の運営に力をつけるより、交流や助け合いといった活動を優先しています」と説明する。

本来の通貨的価値を重視するならば、町の商工会や経済課などが関係してこなければ難しい。でも、ここではあえて福祉厚生課が担当しているという。「あくまで助け合いが根本にあるため、まずは通貨的な価値よりも、『お礼』としての価値が重要なのです」と、

佐々木さんは強調する。

地域通貨の単位は、増毛町のマスコットキャラクターにちなんで「マーシー」と付けられた。団体名も通貨券の名称も同じで「ゆうゆうマーシー」である。「ゆうゆう」には、優、遊、友、悠々、勇などの様々な意味を込めて名付けられたという。



増毛地域通貨券「ゆうゆうマーシー」

この団体に入会するには、年会費 500 円を支払うだけ。そのとき、5000 マーシーを受け取る。「できること」「して欲しいこと」

があれば事務局に連絡、当事者同士の都合が合えば、ボランティアが実施されるといったシステム。感謝の気持ちとしてこの通貨券「マーシー」を渡す。30分の労働で500マーシー、1時間で1000マーシーが目安となっている。

また、同団体のボランティア活動に参加したり、リサイクル品を持ってきたり、雑巾を縫ったりすることでマーシーを稼ぐことができる。一方、フリーマーケットの品物を購入したり、集いへの送迎にマーシーを使うことができる。

■ 地域通貨券を利用した活動

この地域通貨が発案されたきっかけは、2000年（平成12年）、自治体の呼びかけによりボランティア会議が行われたときに遡る。同会議で、「お助けマン的ボランティア」「自治会の見回り」「学童保育」「有償ボランティア」と、4つの柱が決められた。さらに、2300世帯を対象にしたアンケート調査や、町民への聞き取り調査を行った結果、高齢者が社会貢献できる活動「料理の作り方」「魚のさばき方講習会」などを行って欲しいとの意見が目立った。

ならば、「お助けマン的ボランティア」と高齢者の社会貢献を融合させた活動が出来ないかと「ゆうゆうマーシー」の発想が生まれた。

同会議で委員長を務めた元教諭の豊川一巳さんは、「好意を受けると、どうしてもお

礼を渡したくなりますよね。でも受け取る方も、渡す方もどこか気兼ねしてしまいますよね。そんな経験は誰にでもあるはず。そんなときのマーシーなのです」と豊川さんは身を乗り出す。だからこそ、地域通貨券を利用したボランティア活動やまちづくり活動などができれば、と自然な流れで発足が決まったという。



増毛町福祉福祉厚生課佐々木さん（左）、元代表の豊川さん（右）

■ 依頼は「除雪」と「草刈り」ばかり

こうして、2002年11月から試験的に地域通貨券「ゆうゆうマーシー」を発行、翌年6月から本格的に活動をスタートさせた。

同事務を福祉厚生課の職員である佐々木さんが担当した。「最初は、仕事を頼む側と受ける側のマッチングにかなりの時間を割いていた」と佐々木さんは振り返る。「できること」と「して欲しいこと」のマッチングは、簡単ではなかったという。高齢者の多いこの町では、「して欲しいこと」のほとんどが、「除雪」と「草刈り」だった。簡単な作

業などは、わざわざ頼まないのだ。さらに、何回か枝の剪定作業などの軽作業を「頼み・頼まれる」関係ができると、会から離れて直接やり取りするようになっていった。

「一時期、なかなか活動が軌道に乗らなくて随分落ち込んでいたことがありました」

佐々木さんはそう打ち明けてくれた。

「そのとき、町の人たちに『焦らなくても、できることを一つずつやっていけばいいんだよ』と慰められました。それで気が軽くなったのです」

さらに、少しずつ同団体の活動が目されるようになっていく。2003年には、道庁主導の「高齢者が住みやすいまちづくり構想」で、ゆうゆうマーシーの活動の重要性が認識され、2004年には、高齢者や障害者の自立や社会参加を促す活動が認められて、「北海道福祉のまちづくり優秀賞」を受賞している。

現在、2009年度の事業報告書によれば、地域通貨は定期的で開催されるマーシー市（フリーマーケット）などを中心に、年間総額36万マーシー（3万6000円分）が使用され、会員166人が利用している。また、様々な事業やイベントを実施、野草探検試食会、ホームカバー講習会、ベンチの設置、花壇作りなどのほか、海岸ゴミ拾いなど幅広い活動を展開しており、「年間の活動実績は87回、のべ823人が参加」と、同報告書に記載している。

そのほか、マーシーではまかないきれない重労働に対しては、「有償ボランティア」としており、草刈り、冬囲い、除雪、機械を使った畑おこしなどは、有償でボランティアを依頼している。



「よってけ家」で作品を販売している森さん

民家を開放して「ゆうゆうマーシー」の集会所となっている「よってけ家」で、毎週水曜日に集いがある。

その集いに顔を出していた森アヤさん（77）は、古布を利用してタオルやエプロン、帽子などを作っており、「よってけ家」やマーシー市などで作品を販売している。「作品が売れるのは嬉しいですが、それよりも一人暮らしなので、この場所に来てみんなとお喋りをするのが楽しみ」と嬉しそうに話す。

斉藤トメさん（77）は、野菜や山菜などをここで販売、売り上げの一部を寄付している。少しでも稼ぐことで自立した生活を目指しているという。

■ 連絡先

〒077-0205 増毛郡増毛町弁天町3丁目

増毛町健康センター健康一番館

ゆうゆうマーシー 代表 渋谷正之

事務局 佐々木香織

TEL：0164-53-1111(内線518)